

ウィリアム・アーヴィン著

ウォルター・バジ ョット (3)

訳 渡 辺 弘
立 川 順 子

この時期、彼は憂うつ症に悩まされた。その原因ははっきりしており、一つは非常に重大で現実的であった。つまりそれは母親を襲った大いなる悲劇で、彼女についてはさらに詳しくここで述べる必要があるようだ。この感傷的で神秘的な婦人は、確かに非常に魅力をもった人物であった。謹厳で生真面目なハットンですら、彼女とは親しくなかったのにもかかわらず、「彼女は大変美しく快活な女性で、ブリストルのエストリン博士の息子との先の結婚により、若くして知的雰囲気の中で育ち、それによって多くのものを吸収していた」¹⁷⁾と語っている。G. H. ソーテルはウォルターの父と結婚する少し前の38才の彼女を「大変生き生きとして聡明で魅力的な未亡人」¹⁸⁾と表現している。72才の彼女を知っているバリントン夫人は、彼女の「美しい顔色とその他の美貌の面影」、人々の注意を引く、きっぱりとした響きをもつ「静かで説得力のある」声、「知性的な快活さ」「知的快楽に対する強い関心」「周りの雰囲気に生命を吹きこむ力」「ユーモアという活力剤でもってそれを鼓舞する力」など彼女について詳細に説明している。バジ ョット夫人自身の手紙という証拠は、もっと多くのことを明らかにしてくれる。それらは敬虔さとユーモア、天真らん慢さと如才のなさ、適度な強情さと唯一つの解釈のみを認める、つまり究極的な論理は感情の中にあり、ゆえに作家は非常に女性に向いた仕事であるというあの奇妙に非論理的な方法と混ざり合った高度に道徳的な原理とを表わしている。驚嘆すべき如才のなさとしきをもつだけでなく、感情と情愛（その中心原理は尊敬と愛であった）の人間であり続けたということは、明らかに彼女の大きな魅力の一部

であった。このような献身という宝が授けられた人間は、彼女の夫よりもむしろ息子のウォルターの方であった。生まれながらの情愛の深さ、性格と気質が酷似している点、共通の才能と魅力、これら全ては二人の間の絆を強めるのに寄与した。しかしいかなる説明も、次にあげる手紙ほど十分にバジョット夫人の個性の比類なき魅力と、それが息子に与えたにちがいない影響とを表現しえないだろう。

1845年6月11日

聖バルナバスと私の最愛なるスタッキーの命日

私の大切なひとよ。

おなたの手紙に感謝するために私は急いでこの手紙を書かねばなりません。あなたが今週、私達といっしょに楽しく過ごすのはよそうと思っていますと聞いて「ちょっぴり」がっかりしましたが、あなたがそちらに居続けることが出来るほど健康なことを感謝すべきで、ごやっかいになっている人々や神様の恩に報いるために、日々の仕事に精出し、日常の務めや職業に全力でとり組むべきだという私の主義に従って不服めいたことは言うてはならないと思います。でももしブライト先生がもっと空気のきれいなところへ転地するようお勧めになるなら、（今は天候がとても変りやすく、あなたも大変な暑さを経験しているので、そうなさるかもしれませんが）私達は大喜びであなたを歓迎するでしょう。あなたと同じ年頃のスタッキー（彼女の最初の結婚でもうけた息子、死亡）と同じ位にこの上もなくあなたを愛し、大切に思っていますということは今さら申すまでもないことです。

あなたへの私の愛はトゲのないばらのように幸福に満ちたものでした。なぜならあなたは誕生のときからずっと幸福な状態にあり、私が追求してきた知的研究に喜んで参加してくれたからです。けれどもそれは私があなたの真似をして文学をやらねばならないというわけではありません。（もっとも私が子供の頃「エディス、そんなに本に夢中になってはいけません」と大声でよく叱られたくらいですから、本は常に好きでしたけれども）

というのはウィリアム・ウッドについてあなたと議論していたとき、パパがバークについてのあなたの事実説明をしてくれて、私のことを愚かだと言っただけでなく、レイノルズ叔母まで真面目な顔で「ねえ、エディス、あなたがそう思うからと言っと、ウォルターが間違っていると考えるべきではないわ。だってあなたは自分が無知であることを承知しているのだから」と言ったものでした。私はそのことを深く認めてはいるのですが、その時は心の中で思っただけでした。私はウォルターがすぐに改善に役立ち有効な自分自身の研究のために、解明したことを他の人々に公

開することを望んでいます。そして、テーマの深さにはまだ欠けるかもしれませんが、彼は行ってくれるという「気がしています」…私のしなやかな心は愛する兄を失った悲しみから日々回復しています。私の心は彼の心と同様に「きっと快活なのでしょう」残されたお恵みを享受しているのですから。まるでもっと空気のきれいな土地へ転地し、私が地上で神様に感謝しつつ求めている会話と霊的交わりが、いまだ彼と続けられるかのように、いつも私自身の兄のことを思っています²⁰⁾。

夫や息子の人生と同様にバジョット夫人の人生を暗くした悲劇は、後年彼女が狂気の発作にしばしば襲われたということであった。それは大変な不幸の連続の結果であった。彼女の最初の夫は彼女がまだごく若い頃に他界した。2, 3年後にこの結婚で生まれた長男がある病気が原因で亡くなり、二番目の息子は馬車事故のせいで死亡した。三男は生まれながらの白痴であった。これらの出来事が彼女の頭を混乱させ、大体において回復してはいたものの、年とともに狂気の発作がぶり返した。このような不幸がウォルター・バジョットのような人間にどのような意味を与えたかはここで詳しく述べる必要はないであろう。彼の人生の最大の喜びが同時に最大の悲しみとなり、それについての知識が成長期の彼に徐々に伝わったようであるので、いっそう悲惨であった。彼の幼い頃の手紙には、理解しがたい母親の奇行を不思議に思うという哀れを誘う一節がある。奇妙にもしつこい質問に対する返事のようなのであるが、12才のとき彼は彼女に宛て次のように書いている

私がお母さんに会いたがっているかどうかという質問にどうして返事をしてほしいと望むのか私にはわかりません。言うまでもないことなので、私は返事を控えました。私は心からお母さんに会いたいと思っています。いやむしろお母さんと最愛のお父さんにもう一度会うのを心待ちにしています²¹⁾。

この悲劇は彼の人生と性格に決定的な影響を及ぼした。確かにそのことは彼の英国人的な自制心を助長した。これほど率直で話好きな人間でいながら、内面の個人的な感想を表面に表わさなかった人間も少なく、バジョットと比較すればディズレーリは秘密の旗印を掲げてはいても、中身は透けている。そのこと

は特別、平坦で幸福であったかもしれない経験を深め、生来の冷静で合理的な気質に、さまなければ持ち得なかったかもしれないような暖かさと豊かさを与えた。そしてそのことに対しては、ハートリー・コールリッジやウィリアム・クーパーに関する評論が、繊細で感受性に富んだ性格への鋭敏な洞察を伴って、雄弁な証拠となっている。自らに絶え間ない不安な緊張を加えることにより、またエネルギーを弱め、心の平安を壊すことにより、それはバリントン夫人が主張しているように、彼が評論よりももっと『創造的な』文学を試みるのをさまたげたと考えられよう。しかしそのような仮説はどれも大いに疑わしい。彼がより高遠な芸術形式に特に強い憧れを抱いたとか、彼が成し遂げた素晴らしい成功の他に、ふさわしい非凡な創造的才能をもっていたという証拠は殆どない。

バジョットは自らの不幸に彼らしいやり方で対処した。彼はそのことを口にしたことは一度もなく、また外に現われる態度や生活様式がその影響を受けるということもめったになかった。しかし父親以上に彼は母親の側に立ってそれと戦い、妄想という迷路の中を忍耐強く彼女の後に従い、ある時は気転のきくユーモアで、またある時は納得させるような理屈で奇妙な想念を追放し、慰めが必要な時は慰め、厳しさが必要な時は彼女自身と家族のために、気持ちを抑制するための出来る限りの努力をするよう、真剣に勧めた。この経験とこれらの尽力が感じやすい男に何を犠牲にさせたかは、ただ想像しうるだけである。手を伸ばしさえすれば自分のものになったかもしれない輝かしい経歴に伴う魅惑的なものを、彼は母親に対する義務と彼女を助けたいという願望に反するものとして、重要視していなかったようだ。1852年、彼は弁護士資格を得たとき、ロンドンという大きなプロの世界での成功を保障する全ての才能をもっていたにもかかわらず、母親の近くにいてやれるようにラングポートにある父方の銀行の会計課に戻った。彼がいかなる道を選んだにせよ、最終的には恐らく彼の業績は大体同じであっただろうが、彼の犠牲的精神はそれでもなお高いものであった。彼の生涯の最後の7年までひるむことなく懸念の重荷を負い、1870年に母親が亡くなったとき、葬儀の後で彼はこう語った——「それに関

して『最もつらい』ことは多くの人々にとってそれが(母親の死が: 訳註) 苦痛の軽減とみられたことでした」²²⁾。

バリントン夫人によれば、バジョットがロンドンで法律を勉強していたときほど母親の狂気が痛ましいほど彼を襲ったことはなかった。4年後に書かれたハートリー・コーリッジについての評論の中で、彼は『エンディミオン』(“Endymion”)の序文を引用している——「少年の想像力は健全であり、大人の成熟した想像力も健全である。しかしその中間の人生には空白があり、そこでは魂は混乱し、性格は定まらず、生活様式は不確かで大志は曇りがちである」²³⁾。バジョットは特に不幸な時期にそのような混乱した期間を通り抜けた。修士号で金メダルを獲得しようとした際の猛勉強がたたって、再び健康状態が悪化した。彼の最も親しい友人であるハットンはハイデルベルグ大学の学生となった。初めて彼はたった一人で下宿生活をした。賢明な助言をしてくれる父親や、魅力的な人柄をもった母親とも遠く離れて、巨大な都市の孤独の中で、彼は現実と想像の暗黒の色合いのうちから自分達の悲劇をみた。彼はいくつかの点で自分は母親に酷似しているということを十分に意識しており、自分の抱える問題と格闘していると、神経が張りつめ、思いが狂気じみて熱に浮かされたように感じられる時は、彼は自分が深淵の辺をよろよろ歩いているのだと信じたにちがいない。その危険がいかにほどのものであったか、私には確かな決め手はない。私が見たことのある未発表の手紙には、その点に関しての証拠は全く見い出せない。しかしハートリー・コーリッジに関する評論は不吉な文章を含んでいる——「遺伝的な悪について語ることは誤った有害なことであるが、遺伝の誘惑に関する神秘的事実について述べることはきわめて正当で賢明なことである」。²³⁾もしこの意見が彼自身の経験について言及しているとしたら、それは単にその危険の大きさを示しているだけでなく、彼がその危険から最終的に受け取った見解をも表わしている。それは何か運命づけられ、抵抗できないものではなくて、意志の力で押さえつけられる『誘惑』であって、事実、彼はそれを抑制した。確固とした墮落しない健全さを最も特徴的な性質とする思想家が、かつて狂気の淵に追いやられる危険の中にあったということは、興味深いことであり、

われわれに勇気を与えてくれることである。精神力の力をこれほど見せつけてくれる例も珍しい。

しかし狂気に対する恐れは（もし彼がそれを感じているとしたら）彼の唯一の関心事ではなかった。未来は大変暗くみえた。法律に関する職業は多くの理由のために不可能であった。彼に開かれた唯一の職業は商業だけであるように思われたが、それに対しては当時、彼は全く熱中出来なかった。著作において経験した成功、つまり1847年、*The Prospective Review* 誌上に通貨に関する論文を、1848年にはジョン・スチュアート・ミル論を発表したことは、彼の意気を高揚させるのには殆ど役立たなかった。恐らく、黒と白という冷たい活字に初めて組み込まれた彼自身の思想を具体化したものを目にして、少し失望したのだろう。

青年時代の悲劇が全く壮重なものであることは稀である。深く純粋な苦悩は、青年期の憂うつと少なからず不可分の状態であった。そしてその憂うつでカトリシズムの概念をもてあそぶこともあれば、陰うつな詩がその主要産物となることも多かった。ここではその詩の一節を引用するにとどめよう。

白痴の子をもつ母親が
迷子になってさまよう子供を捜して
あてどもなく歩き回るように
野生のハイエナが
悪臭を放つ腐敗したエサを求めて
遠吠えするように
飢えきった苦痛は顔をしかめて
やせた生き物のごちそうの原料のまわりをさまよう²⁴⁾。

彼の『詩』の多くは明らかにニューマンの詩をモデルとしており、キリスト教会の色彩豊かな遺風に基づいて、同じように想像力をロマンティックに働かせているのがよくわかる。幼時期の教育が形成した性格と、彼の心の生来の傾向が共に、彼の陥った憂うつに宗教性を付与することに向った。ニューマンの抑制のきいた雄弁と説得力のある論理は、バジヨットに深い感銘を与えていた。

ハットンによれば、彼はカトリックに改宗しそうなことは一度もないそう
うだ。時折、レトリックに凝ることはあっても、心の底では非常に注意深く公
正な態度を維持した。彼は良心に与える権威主義の影響に危惧を抱き、キリス
ト教会自体の中に『低俗な野心のために大衆に権力をふるおうとする傾向』の
あるのを『非難し、恐れた』。しかし教会の壮麗さと由緒正しさ、その組織と
秩序は、疲弊し熱に浮かされた想像力に強くアピールしたのであろう。彼はこ
の当時、精神的孤立感、宗教的真理からの隔絶感を抱いていたようだ。この時
期から始まる彼の評論からの一節は、次の通りである。——「無限の本質を凝
視しているわれわれは、薄暗い 11 月に本物の空をちらっと見ようとして流れ雲
をじっと見つめている人間のようなものである。われわれの視界から雲の層が
一つ一つ通過していくが、依然として同じ微動だにしない灰色のちぎれ雲は残
っている」²⁶⁾ 現世の希望が薄れ、宗教的疑念が増えることに疲労困憊、混乱し、
孤独感に圧迫されて、漠然としたノスタルジックな憧れをもって、バジョット
はカトリック教会の永続性のある権威主義的安定に傾いたのかもしれないが、
それはニューマンの多くの読者や信奉者に特有のことであった。この時期から
まもなくして書かれた『フランスのクーデターに関する書簡』(“The Letters on
the French Coup D'Etat”) の中に、ふざけてユニテリアンの読者の反感を買う
ように意図されていたのだが、個人的体験に基礎をもつような一節がある。教
会は彼のような懷疑者に呼びかけるために設けられている。

部屋の中に閉じ込めなさい——心を空っぽにしなさい——意識の奥深いところま
で下りてゆきなさい——心の構造を精密に調べなさい——信仰の要素を探りなさい
——あなたの最良の年月を仕事に費しなさい——目がかすんで頭が熱っぽく、手がふ
るえるときには、あなたが手に入れたもののことを考えなさい。指で 1 つ 2 つと数え
られないなら、あなたの到達した確信を考えてみなさい。それらのうちのどれを昨日
疑い、どれを明日信じなくなるか思いめぐらしなさい²⁷⁾。

この難局を切り抜ける出口は一つしかない。——「いや、もしあなたが論理的
に考え、教え、思索するつもりなら、われわれのところに来なさい。われわれ

は自分たちの『前提』を用意している。あなたの生まれる前から何年も、あなたの方のうちで最も優れた者でさえ喜んで賛美するような識者たちが、時代の信条を苦勞して体系化したのである』²⁷⁾。

バジョットが初めてアーサー・ヒュー・クラフ (Arthur Hugh Clough) を知ったのは、この頃であった。彼は 1848年11月に、ロンドンにあるユニヴァーシティ・ホールの学寮長となるために、オックスフォードのオリエル・カレッジの特別研究員の職を辞任した。ホールの設立に寄付をしていたので、バジョットは当時、評議員会のメンバーであり、この立場上、彼は新しい学寮長と面会する機会が多かった。彼らは親友となり、詩人が亡くなるまで交友は続いた。ハットンによれば、クラフは「バジョットにとって同時代の誰にもましてすぐれた知的魅力をもっていた」²⁸⁾。この魅力は二人の人間の何か根本的な類似性に依存していたのではなかった。もっとも彼らは動物活力、生まれながらの控え目な態度、偽善に対する憎悪、ワーズワースへのお互の称賛の点で、多くの共通性はあったが。バジョットが新しい友人の中に気の合った仲間よりもむしろ興味深い『見本』を発見していたことは、いかにも彼らしいことであった。クラフは彼の生涯と詩の両方の点で、バジョットが常に鋭く感じていた基本的な真理の生ける実例であった。そして彼は以下に記す時代ほど鋭敏にそれを感じていたときはなかった。ハットンはこのように述べている——

バジョットにとってクラフの大きな魅力とは、私が思うに、彼がいくらか再発見され、いずれにしても認められた（これまで認めた人は殆どいなかった）詩人として真理を発見することの測り知れない困難さを感じていたということだ。それは真理に対する現代人の偽らざる強い感情によって、減少させられるよりはむしろ増大させられるために彼が幾分、逆説的に抱いた困難さであった。その欲求が強ければ強いほど、われわれが信じたいと思うものが真理であると確信することにより、その欲求を非合理に満たし、人間性につきまとう現実の混沌を閑却する危険性が増すものである²⁸⁾。

そして彼の生涯は彼の主義を例証した。何故なら彼は常に疑惑の中に居続けたからである。ハットンに宛た一通の手紙がクラフだけでなく、バジョット自身にも光を投げかけている。

あなたはクラフのことを好きになるだろうと思います。彼は鋭敏ではないにしても、強健で明晰な知性の持ち主です。それで私は自分が彼の回りをぶんぶんいって舞っている蚊のような気分になります。彼は想像力が豊かで、多くの詩を書いてきました。その詩の1部は優れたものです。不幸にしてスコットランドに行ったことがあり、ロスコーは弁護するものの、私には大変屈辱的にその地の酒場の女給、農家の娘や他の生産活動に従事している女たちのことを語っていますが。彼の精神は道德観と一般に道德に適用される法概念に関して欠陥がある点で、あなたが私に賛成してくれると思います。しかし彼は明らかに限りなく豊かな感情をもった、非常に正直で精神的勇気をもった男です。C. プリチャードはオックスフォードで初めてクラフに会ったとき、過度の禁欲主義によって痛めつけられ、この悪弊から回復しなかったのだと思うと語っています。ロスコーと私自身が彼を学寮長の職につけたのでした²⁹⁾。

憂うつが絶えず深まりゆくのに気づいて、バジョットは突然、気分転換を決意し、1851年の秋にパリに出発した。その訪問はヴィクトリア朝時代の成人男子の責任を負おうとする真面目な若者の憤み深く礼儀正しい試みとして始まった。究極的にはそれはバジョットの生涯において、奇異なほどにきわめて啓発的な出来事の1つで、恐らく彼が創り出した最も才気にあふれた著作の1つを産み出した。彼が到着して間もなく、ルイ・ナポレオンの『クーデター』が勃発し、バジョットはユニテリアンの権威ある、やや穏健な理想主義的機関である『エンクワイアラー』誌 (*The Enquirer*) からそのことについて書くよう要請された。『エンクワイアラー』誌自体が近年は一種の『クーデター』の対象であり、巧妙な陰謀家たち、ハットンや進取の気性に富んだ若い知識人たちは、生き生きとした題材を必死で捜していた。バジョットは彼らが当てにしていた以上のものを提供した。パリの空気は革命、ハラハラする危険、気も浮き立つようなデマ、フランス革命という人を酔わせるドラマでもって刺激に満ちていた。その空気を2、3回嗅げば、憂うつ症も雲散霧消した。その残滓は浮かれ芝居じみた冷笑主義であった。彼は昼間は通りでバリケードを築く共和政論者を手助けし、夕方は『エンクワイアラー』誌のおとなしい読者である彼らのシンパのために爆弾を用意して過ごした。これらの読者がクーデターについて何か明確な意見をもっている限りにおいて、彼らはルイ・ナポレオンが非常に不

道德な人間であり、彼がフランスの共和政の自由を破壊したことは無慈悲な蛮行であるということ、また、もし真実が公表されれば、カトリック教会が事件の背後に一枚かんでいたのだと疑いもなく感じていた。バジョットはルイ（ナポレオン）を冷静かつ冷笑的に正当化し、彼が自由を抑圧したことをさっそうと弁護し、読者がまさしく最も憤慨するであろうところで、意地悪く彼らの共感を仮定しながら、カトリック教会を雄弁に称賛して、彼らを動揺させた。彼は皇帝が（バジョットの主張するところによると、『善についての歴史的、政治的論文を眺めることよりも、芝生の上でギャンブルをすることによって政治家の務めの準備を立派に果していた』）彼らに最も必要としていたもの——つまり安定した専制政府を与えたのだと論じた³⁰⁾。というのは、フランス人はあまりに賢すぎて自らを治めることの出来ない国民だからである。彼らは抽象的、論理的推論を行うのが得意すぎるほどである。彼らは熟考するという重労働、または全く何も考えないという安全よりも首尾一貫して考えるという虚栄を好む。彼らは新しい体系の価値と急進的な提案の適切さを検分することに敏感でありすぎて、慣れるほどに長く共和政体を維持することが出来ない。彼らは共和政の習慣の中に落ち着くには、あまりにも合理的で適応性がありすぎる。イギリス人のような大いに政治的な国民のみが、真の自治のための健全な愚かさをもっている。イギリス人のみが「自らの古い学問、熟知している習慣、確かな手段、実証された結論、伝統的信念」の範囲内に自らを押さえる概念に対して敬虔な畏れをもっている³¹⁾。そのような人物は全く安全で非想像的なやり方で、自らの自由を行使すると、信頼される。しかし全ての人間がそれほど幸運であるわけではなく、フランス人は知性という好ましくない性質をもっているの、平和を維持するために立派な暴君をもったことを喜ばねばならない。³¹⁾『クーデターに関する書簡』は明らかに単に『エンクワイアラー』誌の読者の間だけでなく、革命政府の間でも、また、かなりの恐慌状態をかき立てた。バジョットは快活な人間となって、ロンドンに戻った。

第二章 原文註

- 17) P. 3.
- 18) Quoted by Mrs. Barrington, p. 63.
- 19) Mrs. Barrington, pp. 65, 66.
- 20) Quoted by Mrs. Barrington, pp. 73-4.
- 21) Unpublished letter: Octobdr 8, 1839.
- 22) Quoted by Mrs. Barrington, p. 41.
- 23) i. 196, 199.
- 24) Quoted by Mrs. Barrington, p. 171.
- 25) Hutton, p. 15.
- 26) Quoted by Hutton, pp. 19-20.
- 27) "Letters on the French Coup D'État," i, 109, 110.
- 28) Pp. 20, 22.
- 29) Unpublished letter, March I, 1849.
- 30) Hutton, p. 25.
- 31) Bagehot, "Coup D'État," i, 106, 86-111.